

高知県におけるツグミ *Turdus naumanni* の越冬個体数の年変動 (スズメ目ヒタキ科)

田中正晴*

Annual fluctuations population of the Dusky Thrush
Turdus naumanni wintering in Kochi Prefecture
(Passeriformes : Muscicapidae)

TANAKA Masaharu*

Key words: Dusky Thrush, wintering population, Kochi Prefecture

はじめに

ツグミ *Turdus naumanni* は四国では冬鳥として渡来し、各地で普通に観察される野鳥である(和田, 1973; 石原, 1982)。筆者は2004年10月から2014年5月までの10年間、ツグミの個体数を高知県の山間部と平野部において調査した。今回その調査記録を検討したので報告する。冬になるとその年の冬鳥の飛来数の変化が話題となる。ガンカモ類やツル類は全国的・継続的な個体数変動のモニタリング体制があるが、しかしツグミに関してはそのような体制はない。ある程度の期間の年ごとの個体数記録の報告は四国にはなく、国内でもないと思われ、個体数の整理を行うことは学術上の観点より有用と考える。また飛来数が少ないと減少しているのではないかと疑われるが、その増減についても言及した。

調査地と方法

調査地は山間部の香美市物部町三嶺地区(以下三嶺地区とする)と、平野部の高知市高須・大津地区(以下高知地区とする)である。いずれも筆者が頻繁に訪れて野鳥調査を続けている地域である。調査期間は、同地域でツグミが飛来する10月

から飛去する5月までとした。

調査地の概要は三嶺地区は雑木林が主体で、一部に植林地がある。雑木林の樹種はブナ、ケヤキ、カツラ、サワグルミ、トチノキやモミ、ツガなどで落葉広葉樹に常緑針葉樹が混じる(田中, 2013)。植林地はスギ林の中にまばらにヒノキ林が点在する。調査コースは雑木林の登山道(田中, 2013)を使用し、積雪期は雑木林と植林地の混じる林道を使用した。調査地の標高は登山道では約1000m-約1700m、林道では約700m-約1400mである。

高知地区は大部分が冬季に休耕している水田と、一部が畑作地であり、その間に民家、構築物、水路がある(田中, 2004)。北側と西側は国分川河口域で南側は舟入川河口域であり、いずれも堤防で囲まれている。この地域では3月下旬には水田で田植えが始まり、4月下旬には大部分の水田で田植えが終わる(田中, 2004; 田中, 2005)。調査コースはこれらの耕作地の中を通る農道および堤防を使用した。調査地の標高は約0mである。

ここでは当該年秋から翌年春までの越冬期間を当該年度として示す(たとえば2004年秋から2005年春までの期間を2004年度とする)。

調査は三嶺地区は午前中に徒歩で行なった。高

*〒780-0901高知市上町1-8-28
1-8-28 kamimati, kochi 780-0901, Japan

知地区は日中に車中より行った。鳥類の同定は三嶺地区では、7倍の双眼鏡および目視で行なった。高知地区では7倍の双眼鏡および目視で行い、必要に応じて25倍の望遠鏡を使用した。調査中に出現した鳥類は全て記録した。調査コースにより調査地が重なる場合も出てくるため、極力同一個体を重複して記録しないように注意を払った。

結 果

三嶺地区は2004年度から2013年度までに327回調査し、高知地区は同時期に386回調査した。

ツグミの初認と終認については、最も早い初認は2007年10月20日1羽（香美市物部町三嶺）であった。最も遅い終認は2009年5月3日1羽（高知市大津）であった。最多出現数は、三嶺地区では2008年11月15日212羽以上、高知地区では2010年11月28日216羽であった。

月ごとの出現率は、三嶺地区では11月から2月、高知地区では1月から4月が70%以上であった（図1）。最も高い出現率は三嶺地区では12月の81.8%、高知地区では3月の98.0%であった（図1）。両地区がともに出現率70%以上の月は1月・2月であった（図1）。出現率の算定方法は出現調査回数/全調査回数とした。

年度ごとの出現率は三嶺地区では42.8% ± 16.4%（平均値±標準偏差、以下同様）であり2005年度、2007年度、2009年、2013年度が50%を超えて高くなっており、2004年度、2012年度が30%以下で低かった（図2）。高知地区では55.9% ± 17.0%であり、2004年度、2006年度から

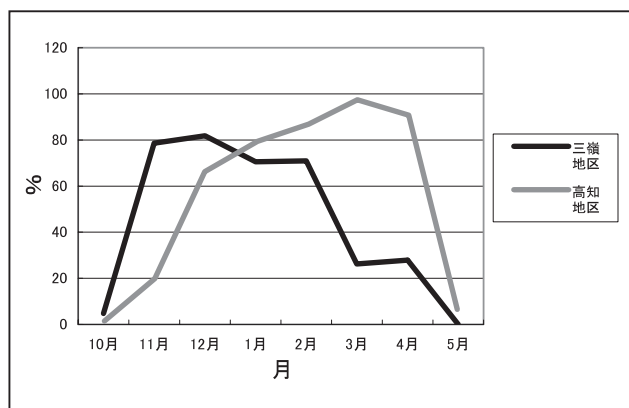


図1. 三嶺地区と高知地区の月ごとの出現率 (2004年度-2013年度)。

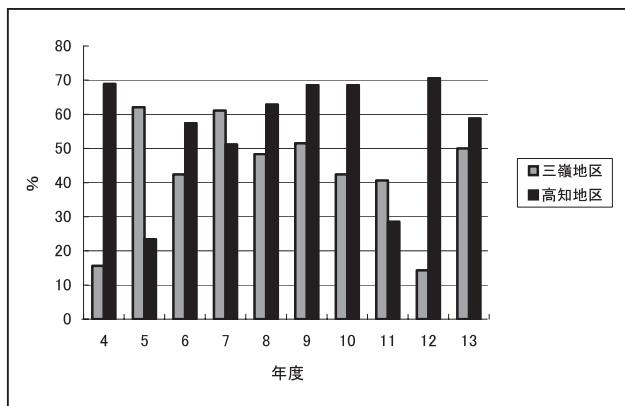


図2. 三嶺地区と高知地区の年度ごとの出現率 (2004年度-2013年度)。

2010年度、2012年度、2013年度が50%を超えて高く、2005年度、2011年度は30%以下で低かった（図2）。両地区がともに出現率50%以上の年度は2007年度、2009年度、2013年度であった（図2）。両地区がともに出現率30%以下の年度はなかった。（図2）。

年度ごとの調査1回あたりの平均個体数は三嶺地区では6.32羽±6.26羽であり、2005年度、2007年度、2008年度が10羽以上で多く、2004年度、2012年度が1羽以下で少なかった（図3）。高知地区では18.44羽±15.15羽であり、2006年度から2010年度、2012年度と10羽以上で多く、特に2006年度、2008年度、2010年度、2012年度は30羽以上であった（図3）。2005年度、2011年度は1羽以下で少なかった（図3）。両地区がともに平均個体数10羽以上の年度は2007年度および2008年度であり、両地区がともに1羽以下の年度はなかった（図3）。

出現率が50%以上で平均個体数が10羽以上の年

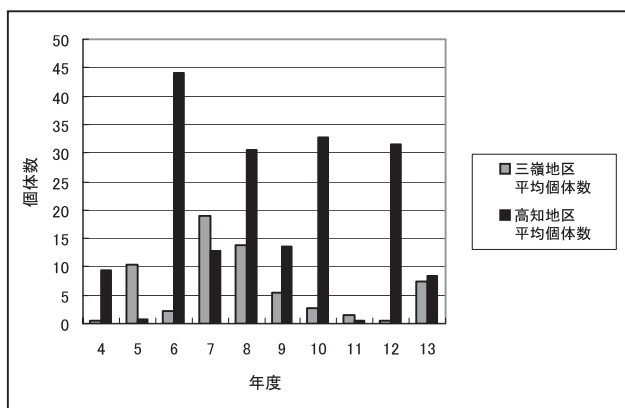


図3. 三嶺地区と高知地区の年度ごとの平均個体数 (2004年度-2013年度)。

度は、三嶺地区では2005年度、2007年度であり、高知地区では2006年度から2010年度、2012年度であった(図2, 図3)。両地区ともにこの条件の年度は2007年度であった(図2, 図3)。

出現率が30%以下で平均個体数が1羽以下の年度は、三嶺地区では2004年度、2012年度であり、高知地区では2005年度、2011年度であった。両地区がともにこの条件の年度はなかった(図2, 図3)。

両地区の出現率、平均個体数はそれぞれに多い年もあり少ない年もあった。両地区ともに出現率50%以上、平均個体数10羽以上の年度は2007年度であり、両地区ともに出現率が30%以下、平均個体数1羽以下の少ない年度はなかった(図2, 図3)。

考 察

今回は、高知県の山間部である三嶺地区と平野部である高知地区でのツグミの飛来数に関して、10年間の調査をとりまとめたのであるが、高知県の山間部と平野部の飛来数は、それぞれに多い年度も少ない年度もあることが示された(図2, 図3)。このことは本種の夏季生息地での様々な環境他の要因や、冬季生息地である国内他地域の餌料の結実状況や積雪量といった気象条件などが、関係しているのではないかと推測される。

冬季の前半は山間部の三嶺地区に多く飛来し、冬季の後半は平野部の高知地区に多く飛来した(図1)。両地区の年度ごとの出現率や平均個体数からは、冬季前半に三嶺地区に飛来する個体群と、冬季後半に高知地区に飛来する個体群との関連性は見いだせなかった(図2, 図3)。冬季前半に山間部の三嶺地区に飛来したツグミの個体群の大部分は、冬季後半には高知県内外に飛去すると考える(図3)。高知地区で観察した個体群は高知県内外から飛来し、飛去すると考える(図3)。

冬になると冬鳥の飛来の多少が話題となり、飛来数が少ないと個体数が減少しているのではないかと疑われる。しかし今回の10年間という短期間の調査においても、年度ごとにツグミの飛来数には増減があり、減少あるいは増加の傾向は見出せなかった(図2, 図3)。

今回の調査は四国太平洋側地域の山間部と平野部という生息環境の小さなスケールで行ったものであり、極東アジアから国内他地域の異なる規模の大きなスケールの影響下での調査ではない。ここで得られた個体数データから個体数変動の要因や因果を考察することは不十分と考える。またその年度の飛来数の多少により、ツグミの個体数の増減を論じることは早計と考える。

ツグミの個体数の増減を検討するのであれば、より長期的で広範囲の調査が必要であろう。今回は高知県では代表的な冬鳥であるツグミをモデルとして個体数の増減について示したが、他の冬鳥でも個体数の増減を議論するのであれば同様と考える。

引用文献

- 石原 保. 1982. 四国の野鳥誌. 築地書館, 東京, 190pp.
- 田中正晴. 2004. 高知平野におけるムナグロ1羽の越冬. 四国自然史科学研究, (1): 59-61.
- 田中正晴. 2005. 高知平野におけるハクセキレイの繁殖事例. 四国自然史科学研究, (2): 63-66.
- 田中正晴. 2013. 高知県におけるクロジの初繁殖記録. 四国自然史科学研究, (7): 44-46.
- 和田豊洲. 1973. 四国の野鳥. 高知営林局, 高知, 157pp.

(原稿受理: 2016年1月6日)